

大学放浪記 (37)

伊藤信孝

マエジヨ大学客員教授 再生可能エネルギー学部

本報では7月から始まった新学期の講義の経緯と準備、対応について記す。いささか批判めいた部分もあるが、やはり訴えておくべきと判断し思い切って書くことにした。講義担当は2回目であるが、前は総時間で15時間、今回も15時間という事であったが、講義担当については、いろいろなことがその前後に生じて常に気分的には不愉快な事がやる機を無くさせた。既にこのシリーズでも記したが、当初の担当予定の講義において、授業分担者との間でのコミュニケーションや応答がなく、双方向であるべき打ち合わせが筆者からの全くの一方通行であり、挙げ句の果てにその講義担当から外されると言う結末に至った。その代わりに別の講義を受け持つように準備されたのが先に対応した15時間の講義で、1回当たり5時間で総数3回。最初の2回はスマート農業まがいの内容で、最後の1回は水に関するエネルギー利用についてのものであった。この最初の対応から学んだことは、何も文句を言わず、言われるがままに従って行くのが賢明と言うことであるが、かと言ってこちらから聞かないと相手側（管理担当者）から連絡が来ることは殆ど無いから、これまた困ったものである。やれプロジェクトだ、やれ毎日が会議で今日も過ぎたと言っているが、筆者から見ればいったい何をしているのかと言うのが正直な見方である。あまり意見を言っても連絡をしても応答が無いので、だんまりを決め込むことにしたが、だからといって問題が解決することはない。

新しい学期が始まると聞かされていても、講義負担の連絡は全く成されず、他の教員は全て学生の履修申告も済み、既に講義を始めていると言うのにである。数少ない知人から「今日は何の講義をしたのか」と聞かれても、「いや別に、講義なんてやっていないので、答えようがない」というと「何故か」という。「担当の係から連絡がくるのを待っているが一向に連絡は来ない」というと「それはおかしい」と言う事になり、「貴方は自分の担当する講義のタイトルや実施予定日、あるいは曜日などを調べる方法を知っているか」と聞かれ「いや、全く知らない」と答えると「自分のメールアドレスとパスワードを使ってアクセスすれば視ることが出来る」と言うが、どうして良いか分からない。そこで知人が代わってアクセスしてくれたが、「貴方の名前は何処にも見あたらない」という事になり、初めて自分の講義負担が登録されていない事を知った。教えてもらったようにメールアドレスやパスワードを入れても「間違っているので再度入力してください」と言うアナウンスばかりが戻ってくる。仕方なくまた知人の支援を得て対応して貰うが、筆者の名前が記された講義名が無ければ見つかるはずもないし、見つけようもない。この事実を見かねて知人のいくらかは「何とかするから、気にするな」といつてくれるが具体的な対応となると難しい。筆者と知人のみが合意して、「俺の講義を分担することで助けてくれ、

よし助けてやる」というレベルの話ではなく、大学のカリキュラムに公式に認可記載されていなければ何の意味も待たない。雇用されている以上、公式記録に残っていなければ、契約上の義務を果たしていない事になる。満を持して副学長に会い、事情を説明し、理解を貰って提示されたのが今回の講義担当である。授業負担に関連して、生じてきた種々の出来事、問題を顧みると、「どうも、筆者に講義負担を為す貰いたくない、あるいはさせないと言う意志が管理担当者に働いているのではないかと思わせるくらい疑心暗鬼になっても当然と言うが如き状況である。何処にその意図があるかははかり知れないが、そう考えることもできる。ではなぜそうなのかと考えると「その理由」が見当たらない。最初の講義負担から筆者が外された事について、別の大学の知人が「貴方の講義分担当担当が、自らの講義に自信が無いので、一緒に分担したがるのではないか」という指摘を思い出す。また、講義を分担すれば、自ずと学生からの評価が出てくる。その時の筆者との比較、例えば、講義内容や授業中の筆者の経験に基づく話、その他、就職や進学、海外の大学との比較など、学生が反応する評価を恐れているのではないか、という点に対する懸念である。現在、当初予定されていた講義は筆者を除き、新たに3名の教員を加えて行われて居ると聞いている。筆者のオフィスの隣にある大部屋に、新たに3つの机と椅子が彼らのために用意されたが、未だ彼らがその部屋に来ていると言う姿は見たことがない。机の上には何も無く、主の来るのをひたすら待ち続ける寂しい机と椅子が鎮座している。誰が何処でどの様に意志決定して現在に至っているかは定かではないが、人間関係における、何某かのわだかまりを懸念しての彼らなりの対応であろうと筆者は勝手に希釈している。ひょっとすると週末の土曜日や日曜日の講義になって居るのかも知れない。だとすると普段がオフィスを閉じたままで誰も居ないと言う状況も納得できるが。被雇用者としての身分であるから、雇用者側がどうしようと勝手であるが、当初の合意と余りにも異なる契約違反と言うことにもなる。本来タイ国、タイの大学に貢献したいという初心であるからその範囲を逸脱しない限りは問題無いが、どうも「自分は歓迎されていないのではないか」との思いは常に心の隅にはある。しかし、言ってみても仕方が無いから敢えて言うことはしない。しかし残念なのはこうした対応が余りにも低いレベルにある事である。インターナショナル (International) から遙かに遠く、友好的 (Friendly) でもなければ、社交的 (Social) でもない。積極的 (Active, challenging) でも無ければ、孤立無援 (isolated alone) という姿勢に近い。干渉もしないし、してくれるなと言う姿勢にも見える。一教員ならそれでも良いが、管理運営に携わる要職に就いている限りはそうした姿勢は許されない。それなりに相当の義務と責任、さらには他の組織人の手本となる対応が要望されるのは当然である。あまりにもその対応が常識から離れていると社会常識やマナー、エチケットまで疑われる。今回の授業担当についても同じような事が生じるのではないかと懸念していたが、予想は的中した。相互信頼はまたしても吹き飛んだ。予め知人に授業実施に関し予期せぬトラブルが生じた場合の対処を想定して学生アシスタントの手配を要請して置いた。あいにくその学生の都合がわるく、知人自身がその代役をしてくれることになっ

た。授業開始の2時間前にその知人を訪ね準備に入ろうとした。しかし Teams MS にアクセスしようとしてもメールアドレスが違ふとかパスワードが適切でないなどとアナウンスが返ってきて一向に前に進まない。やむなく知人に代わって貰い対応して貰うことにした。結果は予め配布された予定とはまるで異なり、その日の講義は予定為れておらず、翌日になっており、しかも講義時間は3時間ではなく30分になっているという。と言うことは聴講する学生にこの情報が届いているとしても日時が異なるし、急にその様な変更をしても学生の方で対応が可能かどうかと言う問題も起きる。どうしたものかと考えた末、知人がカリキュラム担当者に電話でコンタクトした。本人は隣国に出張中であつたが電話はつながった。(電話は相手がタイで使用している電話で番号も同じであれば自動的にコールでき、つながるが相手が隣国からタイの有S人、知人に電話するときには国別コードを用いた普通の国際電話になる。Wi-Fi での急ラインによる無料電話がこのような場合、ベターと言う事になる。知人は急遽学生に連絡を取り、結局20人ほどの修士課程学生のうち8人が聴講可能と言うことになった。しかし筆者にとっては極めて不愉快であつた。この講義のために200枚を超えるパワーポイント・スライドを用意し、最近の学生の履修態度から、注意を引きつけるためのビデオを2本ほど用意してまじめに対応していたが、急な予定変更でビデオはキャンセル(事実上できない状況)でスライドでの講義は2時間になった。いくら熱意を持って努力しても、いつもこの様な形で、講師が望む様に講義を終わる事がなく、日頃から疑問を持つようになった。それは講義に限らず、大学の授業に対する熱意や関心が極めて低く、「本当に何を目指して教育をしているのか」という疑問である。よくもこのような状況の中で学生達が何の疑いも待たず従順に教員に従っているなあと考えると、学生が余りにもかわいそうにも思える。「何を為に、何故この大学を選んだのか」と尋ねてみたい。いささか教育に対しての関心がなさ過ぎるのではないか。結果として前回も今回も講義の分担者(タイの大学の講義分担者)はなく、筆者だけの15時間の講義で終わりそうである。と言うことは分担者なしで、筆者自身でやれと言うことであるが、担当者自身に公式に配布された日程と全く異なる対応が公式のカリキュラム上で操作されているのでは意味がない。しかも1度ならず2度までも、ひょっとするとこれからも起こりうる危険性をも含んでいる。筆者は就任以来、大学の改善委員会(?)のような組織の一員に加えて貰って居るが、組織があつても本気で大学をよくしようと言う気持ちになければ無意味である。

オンライン講義はコロナ禍では致し方ない処置、対応であるが、教育テレビ番組と何処が違うかと言う疑問さえ今では筆者は感じて居る。なぜなら授業中に聴講者である学生達がどの様な姿勢で聴講しているかを想像すれば一目瞭然である。英語での講義であるから、質問は殆ど出ない。オンライであるから聴講時の学生の対応は見えない。接続だけして置いて、氏名だけを画面に残して置けば、その場になくても良いし、その場にも眠っていても良い。ちなみに、講義終了穗に、学生達が如何に授業に参加、聴講したかを確認すべく、一人一人の顔を見ると、そのなかの学生の一人は下着も着ておらず、その授

業聴講姿勢に驚かされた。この姿勢がよいか悪いかは意見が分かれるところであるが、このままでの対応が続けば教育テレビと殆ど変わりはない。それならば予め録画した講義教材を資料として用意し、配布しておくだけでも十分な対応となる。対面講義の重要性は直接相互に貌を合わせて投げかける講義内容に注力し、すぐさま質疑応答ができること、また他人の質問や挙動、姿勢を見て自らレベルとの比較の結果、自らを学び知るメリットも多い。他人の姿勢を見ることで自らの姿勢を見つめ直すことができ、必要に応じて刺激を受け、励まされる事も対面講義の利点、効果である。さらにアカデミックな話のみが講義では無く、教員の経験やキャリアに基づく問題解決への対応法やその結果など、講義する教員ならではの話を聞くこともできる。オンラインであるからそうした話はしにくいと言うことではないが、英語を理解する事ですらままならぬ段階で、質問が出ないのも頷けるような環境のもとでは、教員からの一方的な講義で終わる可能性が大きい。本来の双方向での講義形態が難しいだけに、つい教育テレビと同じレベルで終わる事が多い事を懸念している。対面対話が教員と学生の距離を短くし、相互理解や信頼、尊敬や人格を相互に認識する機会を創る上で重要であることをオンライン講義はつい忘れさせる。

同じタイトルの講義でも、教える側の教員により良い講義、悪い講義に評価が分かれる。オンラインはそれなりにメリットがあることは既述したが、対面講義の重要性、その効果を忘れてはならない。それだけにカリキュラム編成に於ける管理運営のまずさは大学の評価を云々する以前の問題で有り、管理運営担当者は特にこの点に注意を払わねば成らない。



担当講義科目にアクセスする筆者（右）
と支援してくれている知人の教員（左）



オンライン講義中の筆者